

しづ や ただし
洪 谷 正

学位の種類 博士(経済学)
学位記番号 経第75号
学位授与年月日 平成11年3月18日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 マルクス・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」の成立

論文審査委員 (主査)

教授 大村 泉 教授 柴田 信也

教授 中川 弘

(福島大学経済学部)

論 文 内 容 要 旨

1845年から1846年にかけてマルクスとエンゲルスが共同で執筆した草稿『ドイツ・イデオロギー』は、1926年にリャザーノフの編集によって原語のドイツ語ではじめてその第1章である「フォイエルバッハ」章が公表されて以来、多くの版本(リャザーノフ版、アドラツキー版、ドイツ語新版、新メガ試作本)を重ねており、わが国でも、「手稿通りの復元」をはかったという廣松版を含めて、幾種類もの邦訳が刊行されてきた。

筆者は、1995年の3月から12月まで、アムステルダムの「社会史国際研究所(IISG)」において、『ドイツ・イデオロギー』の草稿を調査・研究したが、この調査・研究によって、従来の諸底本ならびに邦訳がいずれも編集上の欠陥をもっていることが明らかになった。これらの版本の欠陥を克服し、この草稿の可能なかぎり正確な復元を目指したのが、筆者が1998年6月に刊行した『草稿完全復元版 ドイツ・イデオロギー』である。

博士論文の第I部第1章においては、IISGでの調査にもとづいて、従来の版本の編集上の諸問題を検討し、併せて、『ドイツ・イデオロギー』の新版の編集にむけての提案をおこなった。第I部第2章では、草稿の調査によってえられた知見にもとづいて、「フォイエルバッハ」章の成立過

程を解明した。

第I部第1章では、従来のドイツ語の諸底本ならびに廣松版が検討される。ここで明らかにされたこれまでの版本の編集上の諸問題は、つぎのとおりである。

リャザーノフ版は、テキストのなかに抹消文を組み込む方式をとっており、最終の文案と修正の過程を同時に把握することができる。しかし、この版では、抹消された章句のすべてが報告されているわけではなく、草稿の完全な復元という点では不完全な版である。くわえて、加筆や修正が複雑に入り組んだ文章についての解読作業が不十分であり、草稿の執筆過程を正確に跡づけることはできない。

アドラツキー版は、テキストの部分に最終の文案を掲載し、「テキスト異文」で抹消や加筆を示すという方式をとる。テキストの部分では、「フォイエルバッハ」章に関して、草稿の順序を大幅に組み替えたために、この章における論理展開をマルクスとエンゲルスの思索の過程にそくして把握することが不可能になった。他方、「テキスト異文」では、最初の文案と修正後の文章を順を追って示すために、草稿では抹消されなかった語句をも含めて、抹消文を表す括弧のなかに入れてある。したがって、最初の文章を生かしながら修正をほどこしている場合に、このような記載状態を正確に把握することができないのである。

ドイツ語新版は、バーネがはじめて公表した2枚の紙葉をテキストにあらたに加え、草稿の掲載順序については、マルクスのページ付けにしたがった。これによって、リャザーノフ版の順序にもどり、ふたたびマルクスとエンゲルスの思索の過程を忠実にたどりうる配列になった。しかし、この版では、抹消の一部しか報告されておらず、この時点では、修正過程を知るには、いぜんとしてアドラツキー版に依拠せざるをえなかった。

新メガ試作本は、「異文明細」で、種々の記号を使って数次にわたる修正過程を表記しており、この方式によって前述のアドラツキー版の表記法の欠陥も克服された。しかし、この版にもなお抹消語について多くの記載漏れが存在し、「異文明細」の表記法についても、アドラツキー版とは逆に、草稿では改めて書き直された語句を、あたかも最初に書いた語句が修正に際してそのまま生かされたかのように表記するという欠陥がある。さらに、「異文明細」の表記法は、アドラツキー版とくらべても複雑極まりなく、新メガ試作本によって草稿を復元するには、実際には多大な困難がともなうのである。

廣松版は、テキストのなかに抹消文を組み込むというリャザーノフ版の方式を採用しつつ、抹消文と加筆文は、アドラツキー版の「テキスト異文」にもとづいて復元されている。したがって、この版は、前述のアドラツキー版の欠陥をそのままひきつがざるをえない結果となっており、「手稿通りの復元」とはけっしていいがたい。

従来の諸版本の上記のような欠陥を克服し、草稿を正確に再現するために、第I部第1章第3節では、『ドイツ・イデオロギー』の新版の編集にむけての提案が示される。ここでは、草稿に忠実な復元にとって、テキストに抹消文を組み込むリャザーノフ版の方式が適切であることが指摘される。さらに、草稿どおりの左右2欄分割、すべての欄外加筆の右欄への配置、行間への加筆という

事実の報告、冠詞などを含むすべての抹消語の報告などが、新たな版本のための編集方針として提案される。

第1部第2章では、草稿の記載状態から、「フォイエルバッハ」章の成立の問題が考察される。

まず第2章第1節では、現存の「I. フォイエルバッハ」章が当初はバウアー論文の批判として書かれたことを、明らかにしている。「I. フォイエルバッハ」章における長文の抹消部分は、ブルーノ・バウアーの論文「ルートヴィヒ・フォイエルバッハの特徴付け」の批判であり、これらの抹消文が「II. 聖ブルーノ」章に清書され再現されていることは、現存の「I. フォイエルバッハ」章からバウアー批判の部分が分離されて、「II. 聖ブルーノ」章に組み込まれたことを示す。これらの抹消文がバウアー論文の叙述に即した批判となっていること、さらに、抹消文のなかに「このやむをえない脱線のあとで、聖ブルーノと彼の世界史的な諸闘争にたちかえることにしよう」という記述があることから、現存の「I. フォイエルバッハ」章は、当初はバウアー論文の批判として執筆されたことが明らかにされる。

これとの関連で、「I. フォイエルバッハ」章冒頭の紛失部分（草稿3～7ページ）にもバウアー論文の批判が記されていた可能性のあることを指摘し、この紛失部分では、バウアー論文の第4・5節が批判されていた蓋然性が高いことを、「I. フォイエルバッハ」章と「II. 聖ブルーノ」章におけるバウアー論文の引用個所の比較検討によって立証した。

第2章第2節では、「I. フォイエルバッハ」章の成立の問題が、この章と「III. 聖マックス」章との関連において考察される。

「I. フォイエルバッハ」章の成立以前に「ライプツィヒ宗教会議」の構想が生まれ、この構想のもとで、1枚のボーゲン用紙に書かれた「ライプツィヒ宗教会議」が序論にされ、この序論に「聖ブルーノ」、「聖マックス」が続く予定であった。したがって、「聖マックス」章は、このような構想のもとで執筆され、そして、「I. フォイエルバッハ」章の計画は、この「聖マックス」章の執筆の過程で生じた。

「I. フォイエルバッハ」章の後半部分は、当初は「聖マックス」章の一部として執筆されながら、「I. フォイエルバッハ」章に移された2つの部分から成り、このうち第2の部分（「I. フォイエルバッハ」章の第84ボーゲン～第92ボーゲン）には、資本主義の成立史が叙述されている。第2章第2節では、この第2の部分と「聖マックス」章の記載状態とを比較検討しながら、当初は「聖マックス」章の一部として執筆された草稿が切り離されたあとで、改めて「聖マックス」章のために新稿が作成されたことが明らかにされる。そのうえで、「I. フォイエルバッハ」章の成立について、つぎのような結論に達する。すなわち、「聖マックス」章において「本来の市民社会」を考察するなかで、資本主義の成立史が論じられたが、この論述の過程で、この部分を切り離して、「I. フォイエルバッハ」章を編成するという計画が成立したのである。

第2章第3節では、『ドイツ・イデオロギー』の真の筆者（Autorschaft）はだれかといういわゆる「持ち分」問題が再検討される。ここでは、廣松 渉の「エンゲルス主導説」を批判しながら、草稿の記載状態にもとづいて、マルクスがエンゲルスの執筆の場に居合わせていたことが明らか

個所が、草稿に存在すること、したがって、当該の個所では、マルクスとエンゲルスの共同作業は文字どおり両者の共同執筆という形で行なわれていたことが、指摘される。

第Ⅱ部では、「社会史国際研究所」での調査をふまえて編集された『ドイツ・イデオロギー』の新たなテキストを提示し、この草稿の複雑な記載状態を明らかにする編訳者の注記を付した。このテキストは、草稿の photocopy とオリジナルの調査をふまえた最初の日本語訳である。

論文審査結果の要旨

『ドイツ・イデオロギー』は初期のマルクス／エンゲルスのモニュメンタルな作品の一つであり、彼らはここで初めて観念論および観念論的歴史観を克服し、独自の唯物論的歴史観を確立した。このような経緯から、この作品には膨大な研究史が存在する。

標記の学位申請論文における渋谷 正氏の主たる関心は、『ドイツ・イデオロギー』の原草稿の成立・編集問題にある。『ドイツ・イデオロギー』の原草稿には多数の抹消や変更、加筆が存在し、執筆そのものがマルクス／エンゲルス両名の手になるところから、印刷物で草稿を厳密に再現することは困難というほかに、独自の問題圏を形成してきた。

本論文は、第Ⅰ部「『ドイツ・イデオロギー』の成立過程」および第Ⅱ部「草稿完全復元版『ドイツ・イデオロギー』」からなる。第Ⅰ部で、渋谷氏は、最初に、社会史国際研究所・アムステルダムにおける原草稿の調査に立脚して、『ドイツ・イデオロギー』を収録した代表的諸版本、すなわちリャザーノフ版（1926年）、アドラツキー版（1932年）、ドイツ語新版（1966年）、新MEGA試作版（1972年）が、いずれも原草稿の解釈や異文、訂正記載において様々な欠陥をもつこと、原草稿を直接調査することなくこれらの諸版本を独自に再構成した廣松 渉編輯版（1974年）では、先行する諸版本の欠陥が拡大再生産されていることを明らかにする。ついで氏は、文献実証の見地から、『ドイツ・イデオロギー』の首章「I. フォイエルバッハ」の構想および執筆が、草稿執筆のいかなる段階で何を契機に生じたかを推論し、草稿の欠落部分についても説得力のある想定をおこなう。さらに氏は、第Ⅰ部の末尾で、草稿の筆跡や、加筆箇所再現を典拠に、『ドイツ・イデオロギー』の執筆を主導したのは誰かという研究史上の争点に対して、本草稿は文字通りマルクス／エンゲルス双方の協議を踏まえた共同執筆の作品と見なすべきではないか、との問題を提起する。こうした第Ⅰ部を踏まえて、渋谷氏は、論文の第Ⅱ部で、氏独自の編集方針に基づいて、草稿の「序文」および「I. フォイエルバッハ」を編集・翻訳し、可能な限りオリジナルに忠実な原草稿の再現を試み、従来の諸版本の欠を補う。

本論文の研究史に対する最大の貢献は、長期にわたる原草稿の調査を踏まえて『ドイツ・イデオロギー』を収録した既存の諸版本の欠陥を詳細に指摘し同時にそれらを克服する方法を、とりわけ議論が錯綜していた「I. フォイエルバッハ」で具体的に提示することによって、従来の研究史の基本的枠組みに再考を促し、再検討のための基盤整備を着実に前進させたところにある。

また、本論文第 I 部後段における、原草稿の記載状況を踏まえたマルクス／エンゲルスの草稿執筆経過の推定も、印刷＝編集原稿のみを前提にした従来の研究史の限界を明らかにする貴重な問題提起であろう。

こうした渋谷氏の文献実証に徹した草稿研究が『ドイツ・イデオロギー』のマルクス主義、マルクス経済学総体の成立史理解に与える問題の立ち入った解明は、渋谷氏と共に、向後本論文によって裨益する研究者全体の課題であろう。

以上から、本論文は、当該分野の研究論文として高い評価を与えることが可能であり、博士学位の授与に値する研究業績であると判断される。